HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	注意概念と推意理論を用いた日本語指示詞の統一的分析［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	平田, 未季
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(国際広報メディア)
Dissertation Number	甲第11863号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58895
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Miki_Hirata_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）　　氏名：平　田　未　季

審査委員	主査　教授	上　田　雅　信
	副査　教授	大　野　公　裕
	副査　教授	山　田　義　裕

学位論文題名

注意概念と推意理論を用いた日本語指示詞の統一的分析

本論文は、これまで国語学・日本語学において佐久間 (1936, 1951) 以来、数多くの記述的研究が行われ、様々な事実が明らかにされている日本語の指示詞（コ系、ソ系、ア系）の直示用法を、主にマックス・プランク心理言語学研究所の認知人類学研究グループの研究者たちが中心になって発展させつつある、「注意」という概念と「推意理論」を用いた理論的枠組みを用いて分析することを目的としている。

従来の言語類型論的な指示詞研究では、指示詞が持つ意味は対象の空間定位に関わる情報であると仮定され、主に「直示中心」と「距離」という概念を用いて記述が行われていた。これに対して、Levinson などの認知人類学研究グループの研究者たちは、距離概念を用いた従来の指示詞研究は指示詞の意味を分析する上で発話場面の文脈情報を十分に取りいれていなかったことを指摘し、世界の多くの言語を対象としてフィールドワークを行うことによって得られた自発的な相互行為場面のデータを詳細に分析することによって指示詞を始めとする空間を表す表現の意味と機能を分析している。2000 年頃から研究成果が発表され始めたこのアプローチでは、「共同注意」や「注意」等の学際的な認知心理学的概念と推意理論を用いて指示詞の分析が行われており、指示詞研究の新しい理論的枠組みが発展しつつある。

しかし、これまでのところ、この理論的枠組みを用いた日本語指示詞の分析はまだ行われていない。本研究は、この理論的枠組みを仮定し、「聞き手の注意」という通言語的な概念と新グライス派の尺度推意理論を用いて日本語指示詞の分析を行うことによって、国語学・日本語学が日本語指示詞についてこれまでに明らかにした事実を説明することができるだけではなく、従来の研究では記述的一般化として指摘されるにとどまり、これまでその重要性が十分に認識されていなかった次の 2 つの問題が解決できることを主張した。一つ目は、「ソ系は『聞き手領域指示』と『中距離指示』用法を持つ多義的な形式なのか」、あるいは「両者は同一の原理によって統合することが可能であるのか」という中距離指示に関わる問題である。

二つ目は、「コ系とア系は、『近』、『遠』という対称的な意味を持つと記述されているにも関わらず、なぜ実際の分布は非対称的であるのか」という「近称制約」の問題である。

まず、ソ系の中距離指示用法の問題については、中距離指示が発話時に聞き手が既に視覚的注意を向けている物理的対象を指す「聞き手の注意の存在」を示す用法として分析できることを示した。これに対して、聞き手領域指示は、聞き手の注意の存在を示す用法から派生的に生じた二次的な用法であることを論じた。さらに、この分析では、ソ系が持つこの 2 つの直示用法はこのような形で統合することが可能であることを主張した。

次に、コ系とア系の指示の非対称については、まず、新グライス派の尺度推意理論を用いて、コ系とア系は情報提供性の異なる対照集合を形成しているという分析を提案した。さらに、この分析では、コ系とア系の指示詞のうち、空間情報を意味として持つのはア系のみであること、従来の分析ではコ系が持つとされてきた「近」という意味概念は、対照集合の存在によって生じる Q 推意であり、破棄することが可能であることを示した。さらに、この分析では、空間情報を持たないコ系の指示領域はア系より広いため、近称制約として述べられた分布上の非対称性が生じることを論じた。

審査は 1 時間 40 分にわたって行われた。まず、博士論文提出者が約 40 分間論文の内容についての発表を行った。次に、審査委員及び参加者との間で 40 分間の質疑応答が行われた。最後に審査委員のみで研究成果の意義、方法論的貢献などの観点から本論文の審査を行った。その結果、審査委員は、次の点で本論文を高く評価し、その意義を認めるものである。

まず、第一に、本論文は、この新しい理論的枠組みを用いた日本語指示詞の初めての分析であり、独創性があり、全体的な分析の完成度も高く、この点で非常に高く評価できる。第二に、日本語のみではなく世界の言語の指示詞の先行研究の詳細な調査に基づいて、指示詞の歴史的変化や子供による習得の側面についても分析が行われている点も優れている。

また、問題点としては次のような点が指摘された。まず、第一に、分析に使われている重要な概念である意味的含意と推意の違いを判断するための根拠が十分に明確に論じられていない。第二に、記述が複雑であり、十分に簡潔になっていない部分がある。

これらの問題は残されているけれども、上記のような観点から本論文は高い学術的意義を持つものである。したがって著者は、北海道大学博士（国際広報メディア）の学位を授与される資格があるものと認める。